

日本応用地質学会 東北支部総会・シンポジウム

八千代エンジニアリング(株) 小菅 芳男

同学会の総会およびシンポジウムが5月11日(金)13:00から青葉区の簡保ヘルスプラザ2F蔵王の間で開かれました。

総会では田野支部長(日大)の挨拶に始まり、平成12年度の活動報告、会計報告、平成13年度の活動計画、予算、役員人事、10周年記念行事等が審議され、無事可決成立しました。今年度は日本応用地質学会の研究発表会が10月31、11月1日の2日間にわたり東北支部管内の郡山で開催予定であり、地質調査業協会にも協賛していただけることとなっています。

引き続き、「日本の旧石器問題に応用地質学は何を貢献できるか」というタイトルでシンポジウムが開催されました。これは、昨年11月に築館町の上高森遺跡で発覚した石器ねつ造問題に応用地質学の立場から何が出来るのだろうかとの疑問に答えるべく設定したテーマでした。公開シンポジウムであったことと一般の関心も高かったことから、シンポジウムには総会の倍以上の参加者(94名)が集まった。またテレビ・新聞各社も多数取材にあたった。

シンポジウムは田野支部長の基調講演「シンポジウム開催にあたって—ヒトはどこから来てどこへ行くのか—」に始まり、5人のパネリストがそれぞれの立場からの基調講演を行い、その後総合討論を行った。それぞれのタイトルと発表者は以下のとおり。

○日本における前・中期旧石器時代研究の歴史と問題点

矢島国雄(明治大学文学部教授)
(考古学)日本の考古学発展の歴史と現在の課題について述べた。

○自然科学(第四紀学)からみた前・中期旧石器問題

町田 洋(東京都立大学名誉教授)
(第四紀学)火山灰層序学の第一人者として、考古学とのかかわりを述べた。

○前・中期旧石器時代の発掘調査

—福島市竹ノ森遺跡発掘を中心に—

柳田俊雄(東北大学総合学術博物館教授)
(考古学)実際に東北で発掘調査している立場から、発掘の方法を豊富なスライドを使って紹介した。

○日本の「旧石器時代人骨」の編年

—その現状—

松浦秀治(お茶の水女子大学生生活科学部助教授)

(人類学)人骨研究の立場から、如何に日本の地層(ローム)の中では人骨の保存が難しいか。可能性のあるのは石灰岩の洞窟だがこれは上からの落ち込みがあるため、時代判定が困難な場合も多いことを紹介。

○応用地質学と考古学との接点

大村一夫(日本応用地質学会東北支部副支部長・株式会社大和地質研究所社長)

(応用地質学)最初に地質学の発展の過程においてあったベリンガー教授事件(化石を人工的に制作し同教授をおとしめようとした事件)を紹介し、考古学界がこの捏造事件を出発点として科学的な検証を行うよう求めた。引き続き応用地質学で使用しているテクノロジーが考古学で適用出来るのではないかと提言を行った。

5人のパネリストの発表に引き続き、総合討論では活発な意見・質問等が交わされ、予定時間を20分程度過ぎた5:50シンポジウムは終了した。このシンポジウムは結論の出るような性格のものではないが、応用地質学会としては考古学への協力は惜しまないということが一つの結論とも言えるのではないだろうか。



シンポジウムで挨拶する、田野支部長。



シンポジウムの様子。パネリスト左より、大村・松浦・柳田・町田・矢島の各氏。